



経済学部 経済学科

高木 久史 (たかぎ ひさし) 教授

15～17世紀の日本の貨幣史・産業史を研究
過去の歴史から、現在・未来の経済システムを展望

■ 15～17世紀の日本の貨幣の歴史を研究。…歴史的経験から、現代・未来の貨幣システムを考察。

高木久史教授は、15～17世紀（室町・戦国・江戸初期）の日本で、貨幣として使われたさまざまな媒体（銭・金貨・銀貨・米・手形など）がどう機能したかを実証する研究を行っています。これを通じて、ヨーロッパ中心のグローバリズムという現在に連続する経済システムができ始めた頃、日本社会がどう変化したのかを考察しています。

また、現在、私たちが経済活動の前提としている中央銀行を中心とした貨幣システムは、歴史的にみると当たり前の仕組みでは決してありません。高木教授は、日本の歴史上のさまざまな貨幣システムの経験が、現在・未来の貨幣システムをデザインするにあたりどのような含意を与えるのかを研究しています。

■ デジタル通貨、キャッシュレス、…形の違いはあれど、庶民の需要こそが貨幣システムを作ってきた。

中央銀行デジタル通貨の発行やキャッシュレスの進展が、日本の貨幣システムを根底から覆すかのような論調や、批判的な議論も生まれています。しかし高木教授は、歴史的にはキャッシュレスが決して特別な流れではないと考えます。歴史上の政府は、社会が求める量の金属貨幣を十分に供給できませんでした。そこで庶民は手形や掛取引など別の手段を考え出し貨幣不足を補ってきました。庶民の需要が便利なシステムを生み出してきた歴史を見れば、様々なキャッシュレス決済が誕生するのは必然の流れと言えるでしょう。そして庶民が生み出した貨幣システムを各時代の政府が採用してきた例もしばしばみられます。貨幣システムはその時代の庶民の需要が左右してきたのです。

■ 戦国時代のミクロでローカルな産業の実態から、環境へ庶民が対応してきた歴史を考える。

貨幣の歴史に加えて力を入れて分析しているのが、15～17世紀日本の地域産業です。とりわけ庶民の生産・消費行動というミクロのエピソードを積み上げることで、戦国時代の社会を考察しています。日本の歴史上の産業というと農業が中心に語られがちですが、林業・水産業・窯業・運輸業などに注目することで、従来型の経済史研究とは異なる、複合的で多様な産業のありようを分析しています。

この研究のなかで高木教授が目にするのが、制約のある環境下で生き延びるために庶民がとった行動です。生態系の中の1プレイヤーである人間が、環境の制約を強く受けながら歴史はつくられてきました。科学技術があたかも万能であるかのように思いがちな現代社会も例外ではありません。このことに注目して、未来にきたるべき経済システムに与える含意を考察しています。

高木久史教授 プロフィール 詳細はこちら⇒ <https://webj8.osaka-ue.ac.jp/ouehp/KgApp?resId=S001422>

1973年生まれ、大阪府出身

経歴：越前町織田文化歴史館学芸員、安田女子大学文学部准教授などを経て、2020年から大阪経済大学経済学部教授
著書・論文：『戦国日本の生態系（エコシステム）』（2021年・単著、講談社選書メチエ）

『信用貨幣の生成と展開』（2020年、共著、慶應義塾大学出版会）、『撰銭とビター文の戦国史』（2018年・単著、平凡社）、『近世の開幕と貨幣統一三貨制度への道程』（2017年・単著、思文閣出版）、『通貨の日本史 - 無文銀銭、富本銭から電子マネーまで』（2016年・単著、中公新書）など

所属学会：社会経済史学会、大阪歴史学会、日本史研究会、史学会、神戸大学史学研究会、出土銭貨研究会など

<本件に関するお問い合わせ先>

大阪経済大学 企画部広報課 高濱 Tel：06-6328-2431 Mail：kouhou@osaka-ue.ac.jp

大阪経済大学 広報デスク（プランニング・ポート内） 福嶋、小宮 Tel：06-4391-7156

<https://www.osaka-ue.ac.jp>